古石ひでさと４期目に向かっての議会活動

古　石　ひでさと後援会だより

URL：http://古石.com/

第　４０１３号
発行令和３年２月
古石　ひでさと後援会事務所
岩見沢市幌向南１条１丁目
TEL　２６－２２２６

E-mail-furuishi@gray-plala.or.jp

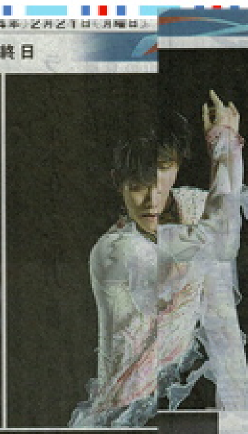
市政についてご提案、ご意見などがありましたらお聞かせください。

北京五輪終了

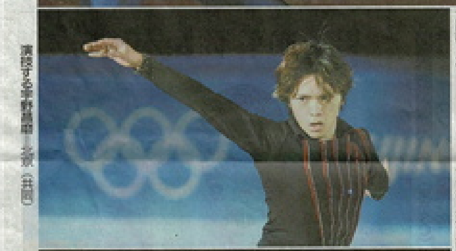
15　五　輪　16版　2022年（令和4年）2月21日（月曜日）

北京 2022　最終日

演技する坂本花織＝北京（共同）


エキシビションで演技する羽生結弦＝北京（共同）

演技する鍵山優真＝北京（共同）


演技する宇野昌磨＝北京（共同）

演技する樋口新葉＝北京（時事）

フィギュア

銀盤の主役 華麗に

エキシビション

【北京共同】各種目の上位選手らによるエキシビションが20日、首都体育館で行われ、日本勢は男子で銀メダルの鍵山優真（オリエンタルバイオ・星槎）や銅メダルの宇野昌磨（トヨタ自動車）、4位の羽生結弦（ANA）、女子で銅メダルの坂本花織（シスメックス）や樋口新葉（明大）が出演した。

鍵山はMISIA（ミーシャ）さんの「明日へ」を華麗に舞い「一分一秒の経験が成長の種になっていく。忘れずに頑張りたい」と決意を新たにした。マイケル・ジャクソンさんの音楽を使った宇野は「ムーンウオーク」など巧みなステップで魅了し「3月の世界選手権に向け、スイッチを入れて練習したい」。

坂本は「タンゴ・アモーレ」を情熱的に演じ「4年後に向け、パワーアップしたい。燃え尽きないようにしたい」と力強く言った。

羽生は松任谷由実さんの「春よ、来い」の曲に乗せ、情感豊かな滑りを披露。「見ていただけるからこそ、僕の演技に何かしらの意味が生まれる。皆さんに感謝したい」と実感を込めた。

メダル授与なし チェン「失望も」

【北京共同】フィギュアスケート団体で2位に入った米国のネーサン・チェンが20日、首都体育館で取材に応じ、メダル授与式が大会期間中に実施されなかったことに「フラストレーションがあるのは確か。失望もある」と不満そうに話した。

国際オリンピック委員会（IOC）はロシア・オリンピック委員会（ROC）の1位に貢献したカミラ・ワリエワにドーピング検査で陽性反応が発覚したことを受け、当初8日に予定した団体の授与式を急きょ取りやめた。男子のチェンら米国の9選手はIOCの決定を不服として大会期間中の実施を求めてスポーツ仲裁裁判所（CAS）に提訴したが棄却された。

アイスダンスのエバン・ベーツは「怒りはある。フェアにやって勝ち得たメダルが手元にないまま、この地を離れる。信じられない」と強調した。

北京冬季五輪の閉会式会場に集まった各国の選手たち＝北京（中本翔撮影）

新しい力 日本躍進

高梨沙羅（ジャンプ）　応援してくださる全ての方々を失望させる結果になったが、ジャンプという素晴らしい競技の場に立つために前進していきたい。

勢藤優花（ジャンプ）　競技以外でも糧となる貴重な経験をすることができた。五輪までの４年間の準備期間でたくさんジャンプと向き合い行動に移せた。

伊藤有希（ジャンプ）　成績を残すことができず、申し訳なかった。４年後の五輪では貢献できるよう、精いっぱい精進したい。

羽生結弦（フィギュア）　努力と結果の意味や価値について深く考えさせられる、これからの人生にとっても大切な時間になった。

住吉輝紗良（フリースタイルスキー）
コロナ禍で多くのサポートをいただき、競技に集中できた。今後は感謝を忘れず、誰かを支えられるよう過ごしていきたい。

浜田海人（スノーボード）　いい順位ではなかったが、足跡は残せた。影響力も増したと思うので、これからは北海道のスノーボードシーンを熱くしたい。

岩渕麗楽（スノーボード）　余裕がなく、精神的にきつい五輪だったが、ビッグエア決勝３回目に、みんなが駆け寄ってくれたことは忘れない。

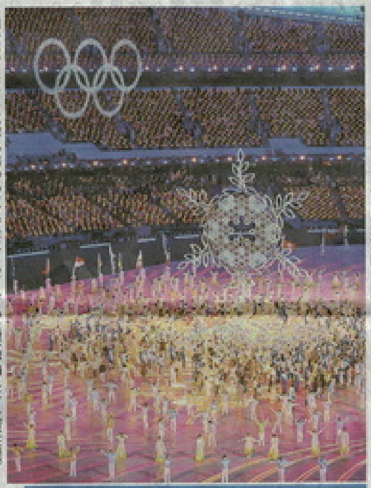
村瀬心椛（スノーボード）　ビッグエアで３位になれて、いい思い出になった。仲間との支え合いなどは今後の人生に生かしていきたい。

山下陽輝（距離）　世界の壁は高いが、決して越えられない壁ではない。今大会を経験して、今後自分の目指す舞台のイメージを強く持つことができた。

杤木司（バイアスロン）　いろいろな人の思いも背負い臨んだ。自分の持てる力は出し切ったと思う。

尾崎光輔（バイアスロン）　たくさんの方々から支えていただいているのだと改めて実感した。次は自分が支えていける存在になりたい。　（共同）

閉会式


閉会式のフィナーレ、「雪の結晶」のオブジェにともされていた聖火が消えた＝北京（共同）

閉会式でミラノ・コルティナダンペッツォに引き継がれた五輪旗。右から３人目はIOCのバッハ会長＝北京（共同）

【北京共同】北京冬季五輪は20日夜、閉会式が行われ、17日間の熱戦が幕を閉じた。日本選手団は総数で史上最多となる18個（金3、銀6、銅9）のメダルを獲得。スケートやスキー、スノーボードなど幅広い競技で表彰台に立った。

選手団主将でスピードスケート女子の高木美帆（日体大職、帯広南商高出）は金1、銀3の計4個のメダルを手にする活躍でけん引。スノーボード男子ハーフパイプの平野歩夢（TOKI

大雪による列車の運休を知らせるJR札幌駅の掲示板＝20日午後4時35分

JRきょう584本運休
道内、暴風雪強まる

道内は20日、発達した低気圧の影響で風雪が強まり、JR北海道は列車232本を運休し、新千歳空港と丘珠空港の発着便計47便が欠航となった。札幌管区気象台によると、21日午後6時までの24時間降雪量は日本海側で最大60㌢、太平洋側とオホーツク海側で同50㌢、札幌市内は同40㌢に達する見込み。JR北海道は21日、特急全114本と快速エアポート50本を含め列車584本を運休する。

JRは21日、宗谷線名寄―稚内間、石北線上川―網走間、留萌線深川―留萌間など10路線10区間が終日運休となり、札幌発着の函館線、学園都市線の普通列車は一部が運休となる。2月上旬の大雪では札幌周辺の駅間で動けなくなる滞留車両が相次いで発生し、除雪作業の遅れにつながったため、JR広報部は天候状況や除雪作業への影響も踏まえて運休本数を決めたとしている。22日も天候次第で運休が出るという。

札幌市は21日、市立の全幼稚園・学校316施設で登園・登校時間を1時間遅らせ、授業も午前のみとする。津軽海峡フェリーは21日の函館―大間（青森）間1便を欠航する。

気象台によると、20日午後7時までの24時間降雪量は根室管内中標津町で34㌢、釧路管内鶴居村で28㌢など。札幌市は9㌢だった。（山田一輝）

選手の和 大きな輪に

㊤閉会式で他国の選手団と一緒に輪になって踊る日本選手団＝北京
㊦閉会式で日本選手団の旗手を務める郷亜里砂＝北京（いずれも野沢俊介撮影）

日本代表 手を振り閉会式

【北京前田健太】17日間にわたる冬季五輪の舞台が幕を下ろした。20日に行われた北京冬季五輪の閉会式は、日本代表選手たちが赤い帽子と上着を身にまとい、手をつなぎ輪をつくるなど、氷と雪の祭典を笑顔で締めくくった。

会場の北京市の国家体育場（通称「鳥の巣」）では、軽快な音楽が流れ、色鮮やかな光にあふれる中、選手たちが入場。日本の旗手は、開会式に続きスピードスケート女子の郷亜里砂（34）＝イヨテック、白樺高出＝が務め、音楽に合わせてリズム良く国旗を振った。

スピードスケート男子500㍍で日本勢では3大会ぶりに表彰台に立った森重航（21）＝専大、別海高出＝は、他の人に担ぎ上げられながら入場、はにかんだ表情で手を振った。銀メダルを獲得したカーリング女子日本代表のロコ・ソラーレは、スキップの藤沢五月（30）らがスマートフォンを手に記念撮影に興じていた。

フィギュアスケート男子で銀メダルの鍵山優真（18）＝オリエンタルバイオ・星槎＝も充実の表情で入場し、「今大会はとにかく全力で楽しもうという気持ちで臨んだ。今回の経験は必ず、今後の自分の成長の糧になると思う」。

女子で銅メダルの坂本花織（21）＝シスメックス＝も笑顔を見せ、「最後の最後まで諦めなかったから、3位という結果に結びついたと思う。このうれしさは一生忘れない」とコメントした。

五輪旗は、次回開催地のミラノ・コルティナダンペッツォ（イタリア）へ引き継がれた。

泣いて笑って感情共有
４年間の重圧を一掃

ロコ 銀

カーリング女子で銀メダルを獲得し、笑顔でポーズをとる（左から）吉田知那美、吉田夕梨花、鈴木、藤沢、石崎＝20日、北京（共同）

【北京吉田学史】銅メダルを獲得した平昌五輪から4年。トップアスリートとしての重圧と向き合いながら、北京冬季五輪カーリング女子日本代表のロコ・ソラーレは日本勢初の決勝に挑み、堂々の銀メダルを手にした。

試合後、選手たちは手を取り合って表彰台に飛び乗った。笑顔だが、目には涙が浮かぶ。頂点まであと一歩届かなかった悔しさと、決勝まで戦い抜いた充実感が表れていた。記者会見でサード吉田知那美（30）は言った。「よく頑張ったと自分たちを褒めたい」

平昌後は時の人だった。2018年の流行語大賞となった「そだねー」に、ハーフタイム時の栄養補給「もぐもぐタイム」。カーリングの本質とかけ離れた面でも話題となった。

今でこそ競技に興味を持ってもらうきっかけとして受け入れたが、吉田知は「正直、平昌終わりのころは戸惑った」と明かす。

敗戦を報道されることも増えた。吉田知は「次、五輪に出られなかったらどうしようというプレッシャーを抱えていた」。

リンク内外で集まる注目。だが、そんな重圧を仲間とともに乗り越えてきた。

「いいよ。緊張して」

昨年9月、日本代表決定戦。最終日の朝、スキップ藤沢五月（30）が「ごめん、緊張している」と言うと、仲間たちは笑った。「いいよ。もっと緊張して」

藤沢は言う。「このチームにいて心地よいと感じるのは、感情をさらけ出しても受け止めてくれること」

不安や緊張を打ち明け、支え合うことを吉田知は「弱さの情報公開」と表現する。「自分たちの弱さをシェア（共有）して、どう対処するか研究してきた。その情報公開を4年間できた」。リード吉田夕梨花（28）は「互いを理解し、助けてもらうところは助けてもらう。チームを各々、好きになっている」と語る。

「ちょっと変だよ」

スタッフも例外ではない。昨年12月の五輪最終予選。勝てば北京行きの決まるトルコ戦前、小野寺亮二コーチ（61）は隣にいたフィフス（控え）の石崎琴美（43）に指摘された。「亮二さん、ちょっと変だよ」

大一番を前に選手だけでなく自身も硬さがあった。あえて皆の前で言った。「俺、緊張しているわ。ごめんな」。空気を和らげた。

試合は相手のショットがさえて敗れたが、次戦で2大会連続の五輪を決めた。「ああいうことを言い合えるのも、今のチームの良さ」と小野寺コーチは話す。

「大丈夫、さっちゃん」

こうした姿勢は北京でも変わらなかった。1次リーグ第4戦でROCに競り勝つと、ショットが不安定だったセカンド鈴